

文化財 ニュース

24 Summer 2021

【会 期】2021年7月17日(土)～9月19日(日)

※前後期で出品作を全点展示替え

前期：7月17日(土)～8月15日(日)

後期：8月18日(水)～9月19日(日)

【会 場】千代田区立日比谷図書文化館1階 特別展示室

【時 間】月曜～木曜・土曜：10時～19時

金曜：10時～20時

日曜・祝日：10時～17時

※入室は閉室の30分前まで。

【閉室日】休館日：7月19日(月)、8月16日(月)、

展示替え日：8月17日(火)

【入場料】一般300円、大学・高校生200円

(千代田区民・中学生以下、障がい者手帳をお持ちの方および付添いの方1名は無料)

※各種証明するものをお持ちください。

【主 催】千代田区、千代田区教育委員会、

千代田区立日比谷図書文化館

【協 力】草津宿街道交流館、国立国会図書館、

株式会社高橋工房、東京大学総合図書館、

長崎大学附属図書館、町田市立国際版画美術館

※注意事項…新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、予告なく予定を変更することがあります。ご来館の前に、ホームページ等でご確認ください。

特集

千代田区立日比谷図書文化館特別展 「紀伊国屋三谷家コレクション 浮世絵をうる・つくる・みる」

いまや日本を代表する芸術として世界中から愛される浮世絵。国内でもテレビや書籍などで目にする機会が多いですが、意外にも当時の楽しみ方——江戸・明治時代の人びとが、どこで浮世絵を手にし、どのように見ていたのかはあまり知られていないのではないのでしょうか。

本展では、「うる」「つくる」「みる」をキーワードに、町の絵草紙屋で売られていた浮世絵が、人びとのささやかな娯楽品として、また暮らしの中の貴重な情報源として親しまれていたことを紹介します。



三代歌川豊国「四代目中村歌右衛門の石川五右衛門」(前期展示)

特別展 「紀伊国屋三谷家コレクション 浮世絵をうる・つくる・みる」

今回、展示作品の中心となるのは、千代田区が誇る美術資料・紀伊国屋三谷家浮世絵コレクション（区指定文化財・寄託資料）です。神田を代表する商家・紀伊国屋三谷家が、江戸時代後期の八代目当主・長三郎の時代に主に蒐集したもので、色鮮やかな錦絵はもちろんのこと、その下絵である画稿や、色版作成のために作られる校合摺といった貴重な資料も含まれています。展示では、そうした資料をもとに、浮世絵の知られざる制作の裏側にも迫ります。

第1章 浮世絵をうる—江戸の浮世絵ショップ—

浮世絵は、現代でいう本屋の役割をしていた町の絵草紙屋で販売されていました。店先に色鮮やかな浮世絵が掛け並べられたその光景は、道行く多くの人たちの目を引き、彼らの購買意欲をかき立てました。

江戸時代後期に一枚 20 文程度（現在の 500 円前後）と安価に売られていた浮世絵は、軽くて持ち運びにも便利だったことから、江戸の大人から子ども、さらには諸国からの旅人や参勤交代で江戸にやって来た武士にも買い求められました。

展示では、当時の絵草紙屋の営業風景を再現したコーナーもお楽しみいただけます。



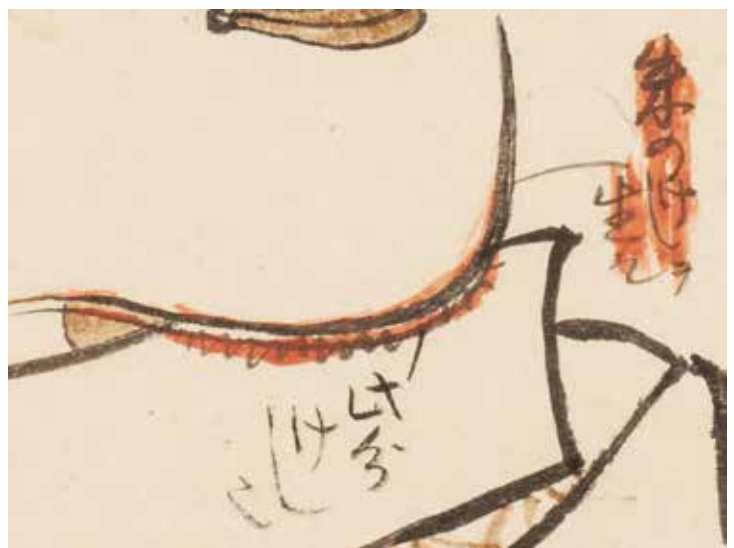
『東海道名所図会』より「和泉屋市兵衛の店先」
（個人蔵、通期展示）

第2章 浮世絵をつくる—職人とパトロン—

浮世絵というと、まず絵師の名前が思い浮かびますが、出版社兼印刷会社の版元をはじめ、版下絵を描く絵師、版木を彫る彫師、紙を摺る摺師と、実に多くの人の手を経て完成に至ります。そして時に、財政的に支援するパトロンの存在がここに加わることもありました。その一人に、三谷家八代目当主・長三郎（1819～86）がいます。浮世絵づくりに熱心だった長三郎は、下絵作成の段階から細かく絵柄の指示を出すなど、自ら積極的に制作に参加しました。



三代歌川豊国「三代目沢村田之助 新造うつしゑ」（後期展示）



長三郎のものと思われる絵柄の修正指示の書き込み（左図の部分拡大図）

第3章 浮世絵をみる—鑑賞と実用—

江戸・明治時代の人びとにとって、浮世絵は身近な鑑賞品であると同時に、暮らしの最新情報を提供してくれるメディアでもありました。役者絵は歌舞伎役者のブロマイドや出演公演のポスターとして、美人画や名所絵は最先端のファッションや人気の旅先を紹介するガイドブックとして、流行に敏感な江戸っ子の心をつかみました。さらに、実際に紙を切り貼りして作るおもちゃ絵や、教育的・教材的な内容の浮世絵など遊びや学びに関するものもあります。質・量ともに豊かな紀伊国屋三谷家コレクションをもとに、バリエーションに富む浮世絵の世界をご堪能ください。

(学芸員 洲脇朝佳)



三代歌川豊国「東都両国橋川開繁栄図」(前期展示)

関連イベント

講座 (日比谷カレッジ)

- ①「江戸へようこそ！—三谷家コレクションにみる浮世絵のある暮らし—」
【日 時】7月31日(土) 14:00～15:30 (開場 13:30)
【講 師】藤澤紫氏 (國學院大學文学部教授)
- ②「歌舞伎を描く—三谷家所蔵の役者絵と三代豊国—」
【日 時】8月14日(土) 14:00～15:30 (開場 13:30)
【講 師】藤澤茜氏 (神奈川大学国際日本学部准教授)
- ③「歌川国芳の武者絵が拓いたもの—スペクタクル&ファンタジー—」
【日 時】9月4日(土) 14:00～15:30 (開場 13:30)
【講 師】加藤陽介氏 (練馬区立美術館主席学芸員)

※①～③共通事項

- 【会 場】千代田区立日比谷図書文化館
地下1階 日比谷コンベンションホール (大ホール)
- 【定 員】各回 60名 (事前申込順、定員になり次第締切)
- 【参加費】各回 1000円 (千代田区民は各回 500円、当日住所の確認ができるものをお持ちください)
- 【申込方法】
ホームページの申込フォーム、電話 (03-3502-3340)、来館 (1階受付) いずれかにて、①講座名、②氏名 (よみがな)、③電話番号をご連絡ください。
※小学生以下のお子さまが参加される場合、保護者の同伴が必要です (同伴者の方にも参加費が必要です)。
- 【申込開始】6月15日(火)

ワークショップ

「浮世絵の実演・体験会～うちわを作ってみよう～」

- 【日 時】8月7日(土) 13:30～16:00 (開場 13:00)
- 【会 場】千代田区立日比谷図書文化館
4階 スタジオプラス (小ホール)
- 【講 師】高橋由貴子氏 (株式会社高橋工房代表取締役)
- 【定 員】20名 (区民優先、応募多数の場合は抽選)
- 【対 象】中学生以上
- 【参加費】500円 (材料費、保険料込み)
- 【申込方法】
往復はがき又はEメールにて①講座名 (Eメールは件名にも講座名を記載)、②郵便番号・住所、③氏名 (よみがな)、④年齢、⑤電話番号を記載の上、下記までお送りください。
送付先：〒100-0012 千代田区日比谷公園 1-4
千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
E-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp
- 【申込期間】6月20日(日)～7月9日(金) 必着



有形文化財（古文書）万控帳 44点

令和3年4月1日付けで新たに、「万控帳^{よろずひかえちょう}」5点が千代田区指定文化財になりました。「万控帳」については、平成5年（1993）4月1日付で、すでに39冊が文化財指定されています。今回、5点が追加指定になり、万控帳は計44点となりました。



追加指定文化財「万控帳」5点

◇万控帳について

万控帳は、明治6年（1873）から昭和50年（1975）ごろまで東京市麹町区富士見町（現・千代田区富士見二丁目）に居住した武田家の金銭支払を記した文書群です。

すでに指定となっている万控帳39冊には、明治15年（1894）から昭和4年（1929）までの生活について記録されたものになります。主に①千代田区及びその周辺の諸施設の記事、②当時の物価の推移を示す記事、③当時の生活用具や食生活の一端を示す記事などが記載されています。

◇指定史料の概要

追加史料5点は、横半帳形式の簿冊3点と、状2点で構成されています。

簿冊3点は、「万控帳」の表題を持つ、昭和5年、昭和6年、年代不詳のものになります。

昭和5年（1930）のものは1年間を通して、昭和6年（1931）のものは1月より11月までの金銭支払いが記録されています。なお、残り1冊は「万控帳」の表題のみで、内容の記載はなく、未使用の状態でした。

状2点は、未使用の簿冊に挟み込まれた状態で見つかりました。いずれも、月ごとの合計支払い金額が記載され、1点は大正13年（1924）、もう1点は昭和5年（1930）～同6年（1931）のものになります。

◇指定理由

今回、追加指定となった5点は、大正13年、昭和5年及び翌6年の物価の推移や、当時の生活用具や食生活の様子を知る上で、重要な生活の記録といえます。既に判明している昭和4年までの内容を、さらに補う内容であることから、千代田の地域史を語るうえで貴重な資料となります。

（学芸員 高木知己）

千代田区特別登録有形文化財（建造物）

水準原点 原点1基、^{えんがい}掩蓋1棟 附、^{ひょうせき}附属標石3基



水準原点の外観

※「水準原点」について詳しく紹介している文化財ニュース22号も、あわせてご覧ください。



22号の記事はこちら

文化財ニュース22号（令和2年発行）で紹介した国指定重要文化財（建造物）「水準原点」は、令和3年4月1日付で千代田区特別登録有形文化財（建造物）として登録されました。

慶事に湧くある日の神田神保町



【写真1】

令和2年度に寄贈された中村家歴史資料の中に、神田神保町二丁目にあった尚美堂に関する写真がありました。尚美堂といえば、明治30年（1897）創業、絵葉書の印刷業を営んでいたことで知られています。残念ながら現在はすでに廃業となっていますが、ガラス乾板などの貴重な資料群は、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）に寄贈されています。

さて、今回区に寄贈された資料は、大正13年（1924）12月に行われた尚美堂の創業者田中良三の長女千代の婚礼に関する写真4点です。寄贈者によれば、田中家が婚礼祝いに製作して近隣に配った写真を、寄贈者の父親も頂いたのではないかとのことでした。残念ながら紙面の都合上、4点の写真すべてを紹介することはできませんが、中でも興味深い2点をここでは紹介したいと思います。

本写真は、今から約100年前の婚礼の様子を伝えるという点で貴重なものとなりますが、特に注目したのはその撮影時期です。大正13年といえば、大正12年（1923）に発生し、都心部に壊滅的な打撃をもたらした関東大震災から、1年余りが経過した時期にあたります。

写真1は、尚美堂の社史をまとめた『尚美堂 絵画とともに90年』でも紹介されています。尚美堂の店舗の前に並ぶ5台のトラックの荷台には、大量の嫁入り道具が積まれています。被災した尚美堂は、この時ようやくバラック建ての店舗で営業を再開した時期でした。画面奥にも同様の建物が並び、震災から1年後の神田神保町の復興状況を知ることができます。

写真2は、千代が輿入れのため多くの人々に見守られるなか、車に乗り込む様子です。この車を利用した輿入れもまた、時代を象徴するものになります。明治30年代、国内に登場した自動車は、昭和初期を境に爆発的に普及しました。その背景には、やはり震災の影響がありました。鉄道や路面電車に甚大な被害が出た結果、自動車の利便性が見直されたためです。とはいえ、自動車は「富裕階級の玩具」や、「貴顕紳士の乗り物」と言われており、当時は極めて高価で税金も高く、現在のように一般市民が簡単に乗れるようなものではありませんでした。写真の車が尚美堂の所有車かどうかはわかりませんが、当時の事情を鑑みれば、自動車を使った田中家の輿入れは、駆け付けた多くの人々を驚かせたと考えられます。

寄贈された古い写真はどれも当時の区内の様子や世相がわかる面白いものばかりです。



【写真2】

（学芸員 山田将之）

〔参考文献〕

『尚美堂 絵画とともに90年』（尚美堂、1987年）

奥井正俊「大正・昭和戦前期における自動車の普及過程」（『新地理』36-3、日本地理教育学会、1988年）

火災速報を伝えた瓦版―「焼場方角附」を読む

今回は、千代田区教育委員会が所蔵する資料の中から、「焼場方角附^{やけばほうかくづけ}」をご紹介します。

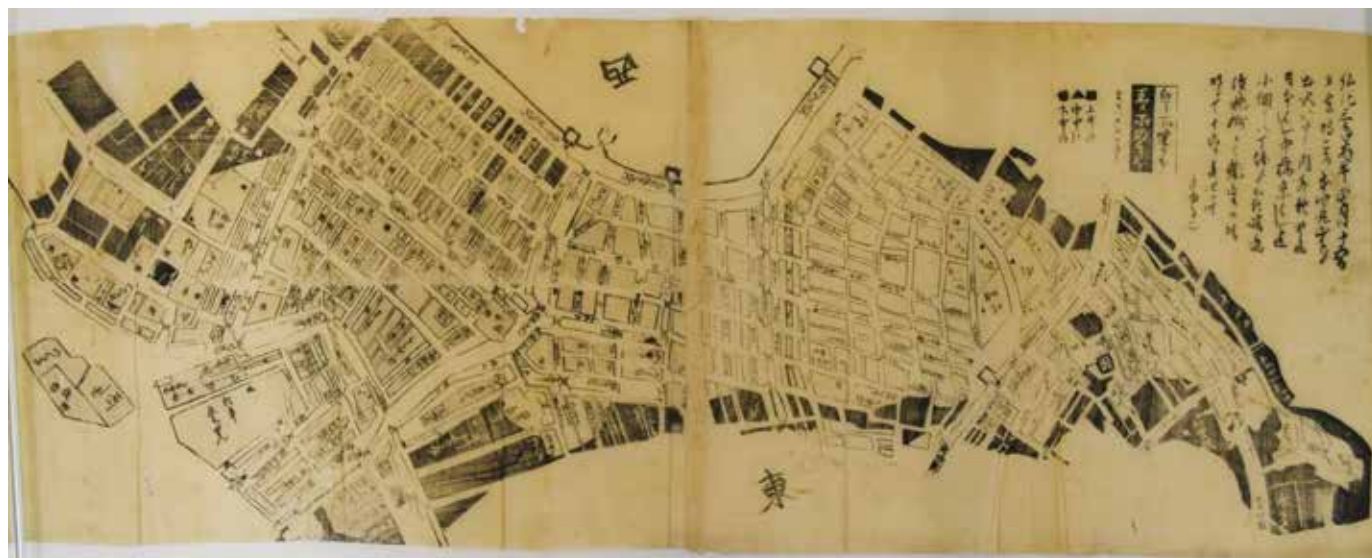
「焼場方角附」という名称は耳慣れないかもしれませんが、「瓦版」と言えば誰もがご存じのことでしょう。「焼場方角附」とは、江戸時代の主に火災の被害状況を絵と文字で記した瓦版のことで、いつどこから出火し、どこが焼失したのか、またはどこが焼け残ったのかという情報が詳細に記載されています。メディアが発達していない江戸時代、瓦版は人々に速報を伝えるための貴重なツールの一つでした。ここでは、神田と麹町の火事を伝えた「焼場方角附」を事例に、瓦版が果たした役割を見ていきます。

◇多彩な瓦版

そもそも、瓦版が「瓦版」と呼ばれ始めたのは江戸時代末期と言われています。もともとは読売^{よみうり}と言い、現存最古のものは天明3年（1783）の浅間山大噴火の際に江戸で発行された一枚摺だとされています。その後、当時流行していた人形浄瑠璃^{あいたいじに}の心中物を扱った瓦版が多数出回りますが、風紀悪化を懸念した幕府が心中を禁止する「**相対死取締令**」（『徳川禁令考』後集・第三、「男女申合相果候者之事」）を出したことにより下火となり、その後は天災や火災、事件などを扱ったものが主流となりました。特に幕末には和宮降嫁や長州征伐、ペリー来航など多くの事件が起きたこともあり、瓦版は政治色を強めていきました。明治になり、時事を扱う新聞が発行されたことで、瓦版はその役目を終えました。

◇神田と麹町の「焼場方角附」

史料1は弘化3年（1846）1月15日に起きた火事を伝えています。「弘化三年丙午正月十五日夕七ツ時ころ本郷丸山下へ出火いたし、内外神田辺日本はし中橋京はし迄、小網丁八丁堀々箱崎辺鉄砲洲にて焼止り候頃、明けて十六日昼四ツ時きゆる也」とあり、本郷丸山町（現・文京区本郷）から出火し、鉄砲洲（現・中央区湊）まで広い範囲が焼けたことがわかります。史料右上の凡例を見ると、白い部分が焼けた地域、黒い部分が焼け残った地域であると書かれています。この火事は、いわゆる弘化三年本郷丸山町火災と呼ばれ、380余町が焼土となり、29軒の大名屋敷と913軒の旗本屋敷が焼失、300人以上の焼死者が出たとされています。



【史料1】

史料2は嘉永3年(1850)2月5日の火事を伝えた「焼場方角附」です。出火場所は「麴町五丁目裏通り」です。史料1と同様に白い部分が焼けた地域を表しています。地図上部には出火日時や焼失地域の情報が淡々と記されていますが、地図右下には「唯々世の人の為にも成ぬべき事と遠方の人にもしらせん便ともならんと図をしるし拙言を添るのミ」と書かれており、遠方の人にも事件を知らせようとする発行者の思いが記されていることには注目できます。また、漢字にはルビが振られており、様々な対象が読み手として想定されていると考えられます。『武江年表』によれば、この火災で、52軒の大名屋敷、19軒の寺院、57町が焼けたと記されています。



【史料2】

◇「焼場方角附」の果たした役割

今回ご紹介した「焼場方角附」は、古書店から購入して所蔵されたため、資料の伝来はわかりません。しかし、「焼場方角附」を始めとして、江戸で発行された瓦版の多くは、各地の^{じかたもんじょ}地方文書の中で発見されることもあります。江戸は人口が多く屋敷も密集していたため、火事が頻発しましたが、地方の人々にとっても、江戸の火事は他人事ではありませんでした。なぜなら、地方領主(大名・旗本)のほとんどは江戸に屋敷を持っていたため、江戸の屋敷が燃えると地方の人々が御用金を負担させられたり、普請のための人足を出したりしなくてはならなくなったからです。江戸で発行された瓦版は、必ずしも江戸市中のためだけに作られたものではなかったといえるでしょう。

(学芸員 篠原杏奈)

〔参考文献〕

- ・ 斎藤月岑著『武江年表』(1882年(続編)、江戸叢書刊行会編『江戸叢書』第12巻(1916年)に所収)
- ・ 小野秀雄『かわら版物語—江戸時代マスコミの歴史』(雄山閣、1988年)
- ・ 木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生—かわら版と新聞錦絵の情報世界』(東京大学出版会、1999年)

日比谷図書文化館の常設展示(V室)で「焼場方角附」を展示しています

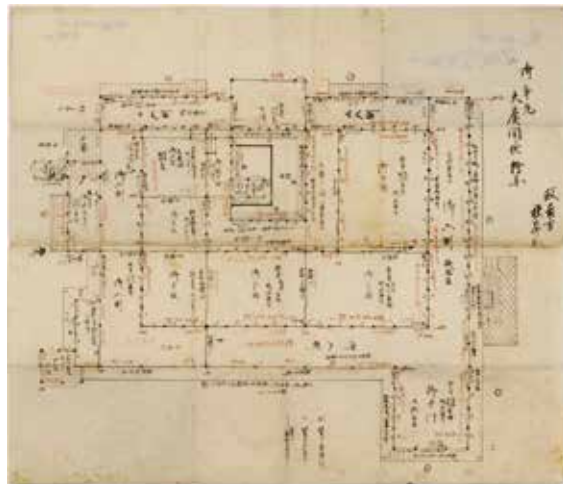


令和元年度特別展
イメージキャラクター
日比丸

令和3年3月に『千代田区文化財調査報告書 江戸城本丸・西丸御殿建築図面史料』を刊行しました。

「江戸城本丸・西丸御殿建築図面史料」(以下、「江戸城建築図面」という。)は、平成22年(2010)12月に区内の古書店から一括購入した史料群で、幕末期の江戸城本丸御殿及び西丸御殿再建の際に、作成され、保管されたとと思われる図面が多く含まれています。三度にわたる史料調査の結果、「江戸城建築図面」の多くは実際に御殿建築に携わった大工の家に伝来したものと推測されます。すでにその価値が明らかとなっている幕府作事方大棟梁・甲良家に伝わった「甲良家文書」(国重要文化財)の図面と比較すると、より現場レベルの計画変更やメモ書きなどの情報を読み取ることができます。

今回の報告書では、新たに撮影した史料画像を大判で掲載し、図面中の細かい書き込みなども読み取れるようになっています。ぜひ手に取って、江戸城の御殿建築の様相を読み解いていただければ幸いです。



「御本丸大広間地絵図」(万延元年)

判型、頁数：A4判、111頁

価格：800円(税込み)

販売場所：日比谷図書文化館

1階ショップ、4階文化財事務局

千代田区役所

2階区政情報コーナー

※郵送での購入をご希望の方は、文化財事務局までご連絡ください。



都営地下鉄 ●三田線—「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 —「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時

土 10時～19時

日・祝 10時～17時

文化財事務局 月～金 10時～18時

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

休館日 毎月第3月曜日

文化財ニュース 第24号

(3,000部)

発行日 令和3年6月30日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局

〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4

TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361

HP: <http://edo-chiyoda.jp>

e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

印刷 株式会社サンワ